台大日本語文研究第 12 期
2006 年 12 月，頁 75-106
本文 2006-1114 收稿，2007-0115 通過刊登

從原型理論來看日文分類詞「—本」
—母語者與學習者對原型性判定的異同—

高蓉蓉*
井上奈良彥**

摘　要

日語的分類詞「—本（ホン）」基本上用來歸類具有細長特質的東西，包括鉛筆、手指、罐裝果汁、電線桿等等。除此之外，「—本」也可與抽象的概念共用，比如用來指劍道或柔道等的勝負招數或足球的射門。然而，對於日語使用者而言，上述例子並非都具有等量的原型性（prototypicality）或代表性（representativeness）。比如說，如果舉例來說明「—本」的用法，對很多人來說，「鉛筆」和「射門」二者之間，顯然前者是個較好的例子，比後者更容易表現出分類詞「—本」所具有的原型細長概念。本文主要是從原型理論（Prototype Theory）來探討這些名詞所具有的原型性。本實驗共有 86 位日本學生和 70 位臺灣的日文系學生參與。實驗中要求所有參與者比較上下各一的名詞組，並判定哪一個在分類詞「—本」的使用上是比較好的例子。依照兩個實驗組所得判定的結果，各組成一個十等級的排名。本文旨在比較母語者和學習者對原型性判定的異同。結果顯示，第一，母語者和學習者都認爲在分類詞「—本」的使用上，比起抽象的概念，具體的東西是比較好的例子。第二，在極好（如具體物品「鉛筆」）和極差（如抽象概念「勝負招數」）的例子上，雙方

* 福岡教育大學外國語科兼任講師
** 九州大學言語文化研究所教授

有極大的共識，至於介在中間的例子，母語者和學習者間對原型性的認定有相當大的差異。第三，母語者對於名詞之間原型性的差異認知遠較日語學習者來得清楚、明顯。相對的，學習者的判定結果顯得模糊。各名詞間的原型性差異不大，區別不明顯。本文提出了幾個假設來說明這些結果。

關鍵詞：原型、分類詞、量詞、第二語言習得

Testing for Prototypicality: L1 and L2 Japanese Speakers Judgments of Classifier *hon*

KAO, Rong-Rong*

INOUE, Narahiko**

Abstract

Rosch (1973) introduced the "prototype" as a theory of categorization. The same prototype effects that are evident in non-linguistic categorization have also been described in linguistic phenomena. The purpose of this study is to compare prototypicality judgments of nouns that go with Japanese classifier *hon* by native speakers and Chinese learners. The data were collected by forced-choice preference tests. The subjects consisted of 70 Chinese learners and 86 Japanese L1 speakers. In the experiment, the subjects judged which of the paired nouns was the better example for the use of *hon*. The preliminary analyses resulted in several findings. First, both L1 and L2 subjects consider concrete basic objects more typical or better examples than abstract items. Second, substantial agreement occurs for exemplars that are very good or very poor category members, whereas there is substantial disagreement among the subjects for items with intermediate degrees of membership. Third, the L1 speakers' prototypicality judgments are more distinct and widely spread out than those of the L2 speakers. Several explanations are postulated for these findings.

---

* Adjunct Professor, Department of Foreign Languages, Fukuoka University of Education

** Professor, Faculty of Languages & Cultures, Kyushu University

Key words: prototypicality, classifier, numerical classifier, SLA

プロトタイプ性の検証
-日本語分類辞「本」に関する母語話者と非母語話者の判断-

高蓉蓉*
井上奈良彦**

要　旨

Rosch（1973）は範疇化の理論として「プロトタイプ性」という概念を提出した。言語以外の領域における範疇化において見られるプロトタイプ効果と同様のものが言語現象においても報告されている。こういった背景を基に、本研究では、日本語母語話者と学習者（中国語母語話者）が、どのような名詞が分類辞「本」を伴うと判断するかを比較対照しようとするものである。データは選択肢を用いた質問紙テストによって収集した。被験者は中国語を第 1 言語とする学習者 70 名と日本語を第 1 言語とするもの 86 名。実験では被験者に、一対の名詞のどちらが「本」を用いて数えるものとして良い例であるかの判断を求めた。分析の結果、次の点が明らかになった。第 1 に、L1 と L2 の被験者両グループともに具体的で基本的な物体が抽象的なものよりも典型的な例と判断した。第 2 に、非常に良い例や非常に悪い例と考えられるものでは判断が一致したが、その中間では判断が分かれた。第 3 に、L1 話者のプロトタイプ性判断は L2 話者の判断より弁別的で良い悪いの差が大きく広がった。本稿ではこれらの結果に対する考察を加え説明要因をいくつか提案した。

* 福岡教育大学外国語科非常勤講師
** 九州大学言語文化研究院教授

キーワード：プロトタイプ、分類辞、助数詞、量詞、第二言語習得

プロトタイプ性の検証
-日本語分類辞「本」に関する母語話者と非母語話者の判断-

高蓉蓉
井上奈良彦

一、はじめに

範疇化（categorization）を行う能力は、人間の認知プロセスのもっとも基本的なものの一つであることに間違いないだろう。範疇化が人間にとって不可欠であるのは、そのおかげで既知の情報を認識し、新規の情報を同化し、事物の特徴や物体や出来事を識別することができる（Bornstein 1984）からである。範疇の古典的な見方によると範疇の定義は、すべての成員に共通する必要十分な特徴の集合となる。この見方の欠点は、多くの範疇が必要かつ決定的な特徴について全てか無かというような構造を有しているようには見えないことである。少なくとも一部の範疇は内部にさらに構造があり、その成員は結束性のある集合としては振舞わないように見える。この説明として Rosch（1973）はを範疇化の理論として「プロトタイプ」を提出した。その主張は、範疇の内部構造はプロトタイプに基づいて構成されており、プロトタイプとは、当該範疇の成員中最も明白なもので、それは成員として適切かどうかという人々の判断に基づいて操作的に定義されるというものである。Pulman（1983）もまた、何かがある範疇の成員かどうかの判断は、それがどれほど適切な例に当たるかという判断とは区別すべきであるとした。たとえば、「ペンギン」は定義としては鳥であるが、「ツバメ」や「スズメ」と違って「鳥」という範疇の代表的な成員とはみなされない。人々は特定の例や典型的な成員を中心に範疇を構築し、他の成員はその典型とどの程度に属性を共有するかに関わってくる。ある範疇の成員すべてに共通する属性はないかも知れないが、プロトタイプと共通する属性が必ず一つはある。

言語以外の範疇化において見られるプロトタイプ効果は、分類辞（classifiers）[1]のように言語現象においても指摘されている。Denny（1976）は、名詞分類辞の意味的機能は、対象物を名詞によって規定される範疇とは異なりかつそれに付加される集合の中に位置づけることであると言う。この分類辞による範疇は人間同士の相互作用の中に入ってくるものが対象となる。分類辞の体系は文化特有もしくは言語特有ものものかどうか、それとも基本的な認知的範疇を反映したものかという論争が行われてきた（Adams and Conklin 1973; Inoue 2000）。これらのことを踏まえ、本稿では日本語の分類辞「本」と共起する名詞の典型性判断について日本語母語話者と学習者（中国語母語）を比較し、特に次の点に焦点を当てる。（１）L1 話者と L2 話者の間で典型性判断がどのように異なるのか、（２）その違いはどこからくるのか。

二、分類辞

（一）分類辞の特性

世界の言語の中にはその名詞の多くもしくは全てが英語では集合名詞（例えば rice）のように振舞い可算名詞（英語なら book など）のように振舞う名詞はほとんどないという言語が多数ある。例えば、タイ語（Hundius and Kölver 1983）や日本語（Downing 1996）や中国語（Tai and Wang 1990）が好例である。このような言語では、名詞は数による語形変化がなく直接数えることができないので、数分類辞は分類辞を伴わなければならない。日本語や中国語において、分類辞は数詞に隣接する形態素であり、有生性、形態、大小、機能などに基づいて名詞の指示物を分類する。日本語では「3 冊の雑誌」や「紙 3 枚」という形式をとり、中国語では「5 條

[1] 本論文で問題にしている「本」などの日本語「助数詞」および中国語「量詞」の一般的名称は英語では classifier と呼ばれる。日本語の文献では「類別詞」と「分類辞」という用語が併用されているが、本論文では国立情報学研究所『オンライン学術用語集―言語学編』に従い、「分類辞」を一貫して用いる。

皮帯」という形式をとる。

分類辞は分類辞体系のうちもっとも良く知られている種類であろう。分類辞は閉じた集合の語彙と考えられているが、この語彙範疇に属する語彙項目の数の多さから他の典型的な閉じた語彙体系とは異なっている。たとえば、日本語では約 150 の分類辞がありそのうち 30 が常用されるという（Downing 1996）。

分類辞はまた、名詞のような他の文法体系と異なり、特定することはできるが形式上の一致によって規定することはできない（Inoue 2000）。分類辞と名詞の共起関係は恣意的ではなく、人間の認知上の範疇化を反映している。しかしながら、名詞とは異なり、分類辞は現実世界の対象物を指示するのではなく、人間がものをどのように認識しているかによって分類するわけである（Denny 1976）。分類辞が作り出し名詞が分類される範疇は必ずしも名詞の形状によって決定されるわけではない。たとえば、中国語ではすべてのパン（食パンでもアンパンでも）は「麺包」と呼ばれるが、パンの形状は細長いパンであれば「條」や薄く切った食パンであれば「片」や丸いパンであれば「個」というように分類辞が示すことになる（Kuo 2000）。Inoue（2000）は、語彙的な意味論も分類辞と名詞の一致を決める唯一主要な要素とはならないと主張している。文脈情報や文化的に確立している概念体系も重要な要素となっている。

もちろん、分類辞にも普遍的側面もある（Adams and Conklin 1973; Denny 1979; Croft 1990）。有生性や形状という特性はほとんどすべての分類辞類に現れる。ただし、さらに具体的なレベルでは分類辞を持つ言語間の違いが顕著になる。たとえば中国語を例に取ると、細長く曲がりくねった物体（縄、蛇、河川、道路）は全て分類辞「條」が用いられ、有生物も無生物も同じ分類の成員となる。ところが日本語では、分類辞は有生と無生に別れ、その概念上（意味上）の区別は厳密に守られる。無生物の分類辞はさらに生物学的分類、大小、形状、機能などいくつかの意味的基準によって分けら

れる。

（二）分類辞体系の意味的構造と機能

Lakoff（1986）によると、分類辞は人間がこの世界の表象をどのように形成しそれをどのように言語に記号化するのかということを研究する上で特別な窓となるという。分類辞にはいくつかの機能がある。まず、名詞の指示範囲を限定するために用いることができる。また、分類辞によってこの世界のものを分類するための特定の次元が明らかになる。たとえば、対象物の形状や有生性についての情報がわかる（Iida 1996）。分類辞の選択は主として意味上のものである。語彙的意味は唯一主要な決定要因でないとしても、研究者の大多数は意味の分析を考慮するという論理に反対はしない。

分類辞類の中には意味的に単純明快なものもあれば、複雑なものもある。日本語であれば、「人」という分類辞はすべての人間に用いることができるし、「匹」はほとんどすべての動物に用いることができるし、「つ」はすべての無生物に用いることができる。一方、「本」のようにその対象となるものの集合が非常に複雑なものもある（Lakoff 1986; Matsumoto 1993）。一般的な用法としては、細長く形のはっきりしたもので一方向に伸びた物体、つまり、鉛筆、棒、缶、木、蛇の死骸、魚の干物などに用いられる。ところが「本」はさらに、柔道などの勝ち技や野球の安打や電話の通話にも用いられる。また、テレビ番組、手紙、注射、バナナ、ニンジン、ズボン、歯、など種々のものに用いられる。この複雑さは意味的な拡張の多様なプロセスの結果である。分類辞ごとに対象となる名詞を全て列挙することは可能かもしれないが、本稿では分類辞「本」の意味的拡張を説明するためにプロトタイプ・モデルを採用する（Lakoff 1987; Aikhenvald 2000）。

三、分類辞のプロトタイプ・モデル

分類辞とその意味的表象は複雑さの程度が多様であるので、抽象的な特性の集合として記述することは困難と考えられる。日本語の

分類辞「本」が対象とする範疇の成員を見ればわかるように、分類辞はすべての成員が共有する特性の集合によって決定される均質な語彙範疇である必要はない。

（一）名詞範疇化の認知的仕組み

Rosch ら心理学者による古典的とも言える研究によると、範疇化の基本レベルというものが存在し、それは物体の顕著な特性（形状、質感、機能など）に関係していて、新たな名詞へは類の拡張によって適用される。一般的に形状がもっとも重要な特性と考えられるのは、機能はわからない場合や時とともに変容する場合があるからである（Erbaugh 1984）。知覚的に顕著な特性は手がかりとしての価値が高いので、各類の中の最初の成員がその後の拡張のもとになる典型という役割を担うことが多い（Lee 1988）。Taylor（1998）は、人々が知覚的また機能的ゲシュタルトとして事物を概念化するのは、この基本レベルの範疇化においてであるという。基本レベルの見本は知覚的に類似し、多くの共通特性を備えている。基本レベルの範疇はその予測力ゆえに認知上重要と考えられる。一つの範疇のプロトタイプ的成員は早くから習得され、その後の概念構造の基礎となり、新たな事例やあいまいな事例が登場するたびに参照される（Rosch 1978）。プロトタイプ性が存在するのは認知上有益だからである（Taylor 1998）。プロトタイプ的範疇によってわれわれは最小の認知的努力だけでたいていの情報を手に入れることができる。

（二）言語的範疇化におけるプロトタイプ効果

Lakoff（1987: 57）はプロトタイプ効果が言語以外の概念構造にとどまらず言語の構造にも見られるという。名詞の分類に現れる言語的な範疇が放射状の構造を持っていることを証明しようとした。ある集合の中には母語話者にとって顕著に感じられる成員があるという。これらの成員は認知上より中心的（つまり代表的）だということになる。比較的周辺的な成員がその集合と関連付けられるのは、他のもっとプロトタイプ的な成員と少なくとも 1 つの素性を共有するからである。この周辺的な成員は中心的成員から認知的な要因で

拡張されたものと理解することができる。例えば、分類辞「本」が適用される集合については具体的な基本レベルの物体が中心的な成員である。プロトタイプ的なものには鉛筆や棒や缶があり、野球の安打や電話の通話は周辺的な成員となる。Taylor（1998）は周辺的な成員は共起関係において文法的に問題となるということはないと指摘する。注意すべきは、比較的周辺的なものについては、中心的なものとは異なり、慣用語法的な制約を受けやすいということである。また、分類辞の範疇において周辺的な成員は話者個人による変異が多い。例えば、Lakoff（1987）も「本」の範疇の周辺的な成員（例えば野球の投球）は話者によって判断が異なると指摘している。また、プロトタイプ理論を中国語の分類辞へ適用した研究でも、分類辞を用いた言語的な範疇化においてプロトタイプ効果が確認されている（Chang-Smith 2000）。その実験の結果では、被験者が特定の名詞に対して応答頻度も応答速度も高いことが示されている。

（三）L1・L2 の習得研究におけるプロトタイプ理論

言語的なプロトタイプ性が L1 習得に影響していることは、言語知識が潜在的で典型例に基づくようなものであると考えられる幼児において報告されている（Shirai and Anderson 1995）。分類辞の習得研究からわかるのは、名詞の集合の場合とは異なり、分類辞習得の初期段階では言語外の規則性や意味が重要だと言うことである。Matsumoto（1985）によると、5 歳から 7 歳の日本語話者は初見の物体に「本」を使う際に、知覚的に明らかな細長い形のものであれば全く問題がないが、比喩的な拡張に基づいて形成されている周辺的で慣用語法的に用いられるものについては即座に使うことができないという。同様の結果が Uchida and Imai（1999）でも報告されている。

プロトタイプ理論を L2 学習や運用能力に適用した研究においても言語的なプロトタイプ性は L2 学習者が文法構造を習得し使用する際に影響していると示唆されている（Hartford 1987; Andersen and Shirai 1994; Kuo 2000; Hu 2002）。Hartford（1987）は英語で常用さ

れる前置詞について L2 学習者と母語話者のプロトタイプ的連合を比較し、前置詞のプロトタイプ的意味は周辺的で比喩的な意味より容易に習得されることを示した。Kuo（2000）は中国語の分類辞についてプロトタイプ的成員は容易に習得されるが周辺的な成員は習得が容易でないことを報告している。Hu（2002）でも、言語的プロトタイプ性は明示的な規則に基づく知識について現れるだけではなく、潜在的で抽象的な知識や典型例に基づく知識においても現れると主張する。

（四）学習者と母語話者のプロトタイプ効果

母語話者と学習者を比較したプロトタイプ性の判断やプロトタイプに関係する差異についての先行研究は主に語彙の分野で行われてきた（Aitchison 1992; Hiki 1996）。本稿に特に関連するのは Hiki（1996）の研究である。この研究は英語の知覚動詞 hear と listen to について学習者のプロトタイプ性判断と語彙選択パターンの関係を調べたものである。その結果は、中間言語のプロトタイプは母語話者のものとは明らかに違いがるというものである。母語話者は学習者よりもステレオタイプ的判断を強く示した。さらに、中間言語のプロトタイプは学習者の L2 語彙の運用能力と密接な関係があった。

言語学習者の頭の中で意味上の範疇がプロトタイプに基づいて形成されるとすると、そのプロトタイプを究明することによって、範疇の内部構造についての理解が進歩すると考えられる。本稿の次節では、日本語の分類辞「本」と共起する名詞の判断について母語話者と L2 学習者を比較する。

四、方法論

（一）範疇内で強制選択式のタスクを用いる理由

プロトタイプ性の研究で多く用いられる実験方法は Rosch（1975）などの点数判断である。この方法では、被験者が点数化された尺度を用いて範疇の成員の典型性を判定する。しかしながら、点数尺度の使用には批判が行われてきた。たとえば、7 点尺度の使

用を Wierzbicka（1990）は問題にしている。Colemen and Kay（1981）の方法論について、Rosch の方法と同様、インフォーマントが与えられた全ての項目を 1 から 7 までの尺度に沿って配列してしまうので研究者の期待通りの結果が得られがちであるという（p. 351）。この方法の信頼性は Maridaki-Kassotaki（1997）も子供の判断を引き出すのには問題があるとする。子供は採点作業に必要な言語的、認知的な能力が不十分であると言う。そこで Southgate and Meints（2000）が提案する代替案は好ましさを判断する方式である。どちらが好ましいかを尋ねることによって、小さな子供からでも典型性の判断を引き出すことが可能になる。同一範疇の典型例と非典型例を同時に提示することによって、幼児でも自分の持つプロトタイプに似たもののほうを長く見つめるということで強制的な選択作業をさせることができる。

Maridaki-Kassotaki の疑問と同様に、採点作業は本研究の L2 学習者にとって言語的にも認知的にも過重な負担となると考えられる。典型性の役割をさらに調査し中国語を L1 とする日本語学習者のプロトタイプ性判断が日本語母語話者のものとどう違うのかを見るために、本研究では好ましさを判断させる手法を修正のうえ用いることにする。相対的な典型性を問題にするために排他的な二者択一方法を用い、同一範疇内の成員間の直接比較を行う。被験者は同一の言語的範疇（「本」が用いられる名詞群）のうちから 2 個の名詞を対として与えられ、そのどちらが分類辞「本」を用いるのに良い例と考えるかを問われる。

（二）被験者

被験者は台湾の 4 年制大学の日本語学習者 70 人と日本の 4 年制大学の母語話者 86 人である。L1、L2 の被験者群は概ね均質な集団である。母語話者は大学 1、2 年生であり、L2 被験者は日本滞在の経験がない日本語専攻の大学 3、4 年生である。

（三）材料と手順

「本」で数える言語的範疇の成員を選ぶために、本テストの前に

別の日本語母語話者グループから産出作業（名詞を書き出してもらう）を行った。その頻度によって得られたプロトタイプ性判断に基づいて 10 個の成員を選んだ。具体的な基本レベルの成員 5 個として、「鉛筆」「木」「指」「髪の毛」「缶ジュース」。認知的な拡張を伴う成員として 5 個、「本塁打」「シュート」「ビデオ（テープ）」「映画」「勝負」である。Kellerman（1986）や Kao（1993）で用いられている排他的な二者択一方式を用い、本テストで被験者には分類辞「本」で数えるものという同一範疇内の成員を対にして提示した。全部で 10 の成員（質問紙上では文字で書かれた名詞）から、全ての組み合わせ 45 対を作り無作為順にに配列した。被験者にはそれぞれ対となっている 2 個の名詞のうちどちらが分類辞「本」で数えるものとしてよりよい例と考えられるかの判断を求めた。付録に質問紙の中国語版と日本語版を掲載した。

五、結果

L1 と L2 の被験者が各対の名詞のどちらを選んだかの集計が表 1 と表 2 である。例えば表 1 を見ると、「鉛筆」と「髪の毛」を比較した場合、66 人の母語話者が「鉛筆」のほうが分類辞「本」を用いて数える例としてより良いと判断し、20 人が逆の判断をしたということを示している。

Rosch（1973）の先駆的な研究とそれに続く研究（Rosch 1975; Rosch and Mervis 1975 など）により、人間は範疇を内部構造のあるものとして全てか無かというのではなく確率的に扱うのだということがわかってきた。言語におけるプロトタイプというのはたいていの母語話者がまず思いつく用法である（Correa-Beningfield 1990）。本研究においても L1、L2 の被験者両グループともに、具体的で基本レベルの物体のほうが抽象的なものよりもより典型的な良い例であると考えたことになる。

表 1 「本」で数えるものの好例（母語話者）

	鉛筆	髪の毛	木	指	缶ジュース	ビデオ	シュート	本塁打	勝負	映画	合計
鉛筆	—	66	76	71	76	85	80	80	85	85	704
髪の毛	20	—	41	45	60	77	72	71	83	79	548
木	10	45	—	53	54	75	71	64	76	75	503
指	15	41	33	—	67	78	78	73	81	80	566
缶ジュース	9	26	32	19	—	71	70	63	78	70	438
ビデオ	1	9	11	8	15	—	50	37	70	52	253
シュート	6	14	15	8	16	36	—	28	67	46	236
本塁打	6	15	22	13	23	49	58	—	66	59	311
勝負	1	3	10	5	8	16	19	20	—	18	100
映画	1	7	11	6	16	34	40	27	68	—	210

表 2 「本」で数えるものの好例（非母語話者）

	鉛筆	髪の毛	木	指	缶ジュース	ビデオ	シュート	本塁打	勝負	映画	合計
鉛筆	—	60	56	58	50	58	53	49	55	60	499
髪の毛	10	—	36	34	39	42	46	47	47	45	346
木	14	34	—	35	32	58	49	39	51	52	364
指	12	36	35	—	42	52	59	47	50	50	383
缶ジュース	20	31	38	28	—	49	63	41	43	47	360
ビデオ	12	27	12	17	21	—	36	28	44	28	225
シュート	17	23	21	11	7	33	—	13	33	36	194
本塁打	21	23	31	23	29	42	57	—	46	44	316
勝負	15	23	19	20	27	26	37	24	—	30	221
映画	10	25	18	20	23	42	34	26	40	—	238

母語話者と L2 学習者の判断に基づく 10 個のものの順位を比較するためにスピアマンの順位相関（Spearman Rho）を計算したところ非常に高い相関（ρ =.903）となり、L1 と L2 の話者群の間で典型性の順序付けに非常に高い相関があることがわかった。図 1（合計数を各グループ内で%に換算して比較）に示すように、母語話者

群も非母語話者群も分類辞「本」で数えるものとして「鉛筆」がもっともよい例であり、それに続くのが「指」だとしている。両群とも具体的で基本的な物体のグループと抽象的で拡張的（周辺的な）もののグループとの間で順位を分けることができ、両者の成員が上位と下位で入れ替わることはなかった。また、抽象的なものの中では、両群ともに「本塁打」を最適例としている。

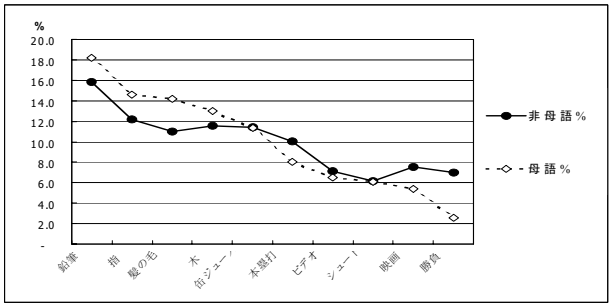


図 1. 非母語話者と母語話者の順位の比較

大きな傾向としては中間言語のプロトタイプ性判断は母語話者の判断と対応しているようであるが、両者の内部構造に注目すると違った型が存在することに気がつく。図 2 が示すように、母語話者の順位付けは学習者のものと比較すると、成員間の区別が顕著で成員間での違いが大きく上下に分散した形になっている。一方、非母語の順位付けを見ると、全体的には成員間の違いはあまり顕著に現れなかった。

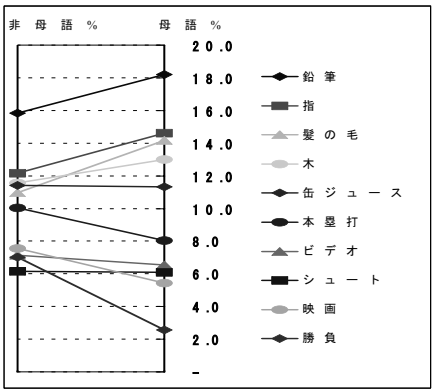


図 2. 非母語話者と母語話者の順位の拡散度

また、図 2 からわかるように、母語話者では「鉛筆」と「シュート」がそれぞれ最適例とあまり適例とはいえないものとして両極端にあり、残り 8 項目は 4 項目ずつに大別されそうである。一方、非母語話者では、鉛筆が突出した適例とされる。残りの 9 項目は大きく 2 グループに分かれるようである。

六、考察

Inoue（2000）は、日本語の分類辞体系は統語や意味の観点からだけではなく認知や文化の観点を含めた統合的な分析が必要であると主張している。子供は文化的、言語的環境の中で分類辞がどのように用いられているのかについて絶え間なく理論を作り上げるという過程をたどっている。日本語特有の社会文化的視覚化能力によって、日本語話者は分類辞「本」と連合する素性［長い］［薄い］［円筒状］などに注目し、さらにそれを拡張して「映画」のようなあいまいな対象物に適用するという。ところが海外在住の幼い子供の頭の中では、異なる言語文化的環境の影響や日本語の社会文化的知識の欠如のために、範疇の拡張が十分に発達しないという。

日本語における分類辞「本」の使用には人間の頭脳で種々の想像作業を行う様相が現れている。Lakoff（1987）によると、われわれの知覚体系は当初は物理的文化的な経験と強く結びついている。言

語の違いによって話者は自身の経験を違った形で知覚化するので、「本」の範疇成員の有契的な（motivated）拡張は日本語母語話者には理にかなっていても L2 学習者には恣意的で不合理だと感じられるかもしれない。本研究でも、分類辞「本」にかかわる日本語特有の社会文化的知識の欠如のために L2 学習者は比較的周辺的な使用例において明確な区別をすることができなかったのかもしれない。母語話者と同等の典型性の尺度を持っていなければ、その判断を求められたときに何が判断の基になるのかわからないであろう。そうすると L2 学習者の判断はいくつかの要因が衝突する可能性が生じる。言語的顕著さ、L1 におけるプロトタイプ、範疇成員（それぞれの対象物―名詞）の出現頻度や親近性、必ずしも自然ではない教室での L2 インプット、などすべてが L2 学習者の判断に影響する可能性がある。本稿では今回の結果を説明するために以下 4 つの要因を提唱する。要因 1 は学習者と母語話者の順位付けの相関を説明し、残り 3 つは学習者のプロトタイプ性判断が母語話者とは異なる内部構造を示したことを説明する。

（一）要因 1：個人間また文化・言語間で共通性があるのは人間の認知過程の普遍性による。

本研究で得られた結果によると、L1、L2 話者ともに具体的で基本的な物体は比喩的な拡張をともなうものよりは典型的と判断した。分類辞の基本的な意味は具体的な物体を数えることにあるとすれば、言語にかかわらず具体的な物体が範疇の中心的成員となることは明らかである。「本」の範疇を規定するもっとも顕著な意味素性は「細長い形」であるので、物理的な形状を伴わない事例は周辺的成員とされることは当然である。

同様の異文化間・異言語間での対応は他の言語における分類辞の習得においても観察されている。Kuo（2000）では、中国語の分類辞の産出と形状の採点という方法において、母語話者と学習者の間で正の相関が見られ、両者の結果の間に有意な差はなく、大部分の例においてもっとも顕著な素性について一致を見ている。Kuo は学

習者が利用できる範囲において認知は普遍的であると結論している。

（二）要因 2：学習者の L1 に基づくプロトタイプは中間言語のプロトタイプ性判断に影響する。

Ijaz（1986）は語彙の転移が生じると、L1 の概念が学習者の発達途上にある中間言語体系に転移し、L2 の語彙ラベルに転写されると指摘する。したがって、L1 の概念が学習者の L2 語彙理解と使用を導くわけである。Aitchison（1992）もまた大人がプロトタイプ性に基づいてある概念範疇の成員を順位付けするように求められると母語や自文化の影響を受けやすいと指摘する。本研究においても、学習者は判断のよりどころは L1（中国語）のプロトタイプであったであろう。中国語では、長い形状のものを数える分類辞は、「條」「支」「根」の 3 種類ある。一方向に長い物体はさらに、硬さ（［硬い］か［柔らかい］）によって分類される。3 種の分類辞はそれぞれ長い物体の異なる素性に注目する。「條」はベルトや縄のような長く柔らかい物に用いられる。「支」と「根」は長く硬い物と共起することが多い。さらに「円筒状」という知覚的な素性が「支」と「根」を区別する。注意点は、［硬い／柔らかい］について知覚的にどちらが顕著かあいまいな場合、例えばキュウリやバナナ、については分類辞「根」が用いられる。日本語と中国語の分類辞体系は類似点も多いが、意味分類の詳細や指示対象の変異がどの程度許されるかという点になると違いが出てくる。中国語の分類辞の体系は日本語の分類辞よりも変異の幅が大きく、あいまいな集合が重なり合っている傾向がある（Tai and Wang 1990）。例えば、指は［支］でも「根」でも数えることができるが、話者が注目している意味素性が違ってくる。表 3 は中国語と日本語において長い形状の物に用いる分類辞の意味的特徴と具体例を挙げたものである。

表 3　長いものを数える中国語と日本語の分類辞の意味特性

意味特性	中国語分類辞			日本語分類辞
	條	根	支	本
有生	±	−	−	−
長く、一方向	＋	＋	＋	＋
硬い	−	±	＋	±
具体的、基本レベル例	魚、ベルト、縄、道	髪の毛、指、ストロー	鉛筆、バット、指	鉛筆、バット、ベルト、縄、道、髪の毛、指
比喩的拡張例	ニュース、判決	（なし）	本塁打、歌、順位	本塁打、電話の通話、ビデオ

「本」の研究においては、学習者が母語話者と近似の順位付けをしたのは、具体的な物体では「鉛筆」や「指」、比喩的拡張では「本塁打」であった。表 3 からわかるように、この 3 例はすべて中国語で分類辞「支」と共起する。つまり、学習者は L1 のプロトタイプから影響を受けたと考えられる。学習者のプロトタイプ性判断は中国語の分類辞「支」が規定する意味素性に従ったと考えられる。さらに、「本塁打」以外の拡張対象は中国語では長い形状のものとは異なる分類辞を用いるか分類辞を用いないかである。この場合、日本語特有の社会文化的知識もなく、L1 からの転移も利用できないということになり、これらの周辺的成員を判断することは困難であるためはっきりとした選択傾向が見られなかったと考えられる。

（三）要因 3：範疇内の成員の相対的出現頻度や親近性がプロトタイプ性判断の重要な要因となる。

Palmberg（1978）は頻繁にまた最近聞いたり見たりした語が学習者の頭の中で一番先に思いつく語となる傾向があると指摘する。他の第二言語習得研究でも相対的頻度や親近性はプロトタイプ性を決める重要な要素となることが確認されている（Hansen and Chen 2001; Hu 2002）。近年の日本語と中国語の分類辞や分類辞の L2 習得および言語喪失の研究によると、分類辞の思いつきやすさは頻度を説明要因とする考え方に合致するという結論を得ている（Hansen and Chen 2001）。また、Hu（2002）の主張では、相対的頻度とプ

ロトタイプ性の高い語の使用の顕著さによって、そのような語の知識を処理する過程がさらに自動化するという。今回の研究においても、母語話者も学習者も大学生であるので、「鉛筆」（さらには筆記具一般）はもっとも親近性があり頻度も高いものである。そうすると両群とも［鉛筆」をもっとも良い例としたことは当然である。さらに、Lakoff（1978）は基本レベルの範疇化に関係する要素は、知覚、動作の対象、心象、文化的重要度、などがあるという。今回の研究では他の基本レベルの物体と比べて、「鉛筆」と「指」は形状と大きさにおいて非常に似通っている。

もう一つ注目すべき現象は、L1、L2 話者ともに自分にとって重要であったり興味があったりするものが高い順位を得たことである。同様の現象が子供のプロトタイプ性順序付けにおいても観察されている（Aitchison 1992）。今回の研究では、サッカーの「シュート」が日本語母語話者と中国と母語話者の間の差を示している。日本語母語話者の順位付けで「シュート」は拡張例の中で 3 番目となったが、中国語を母語とする日本語学習者はすべての例の中で最下位に位置づけた。日本では J リーグなどのせいで近年サッカーが人気を博しているため、「シュート」のほうが伝統的な柔道などの勝負（「一本」）よりも高く位置づけされたのはうなずける。対照的に、学習者群の住む台湾ではサッカーの人気は日本ほどではないので、日本語学習者としては日本の伝統的スポーツのほうに興味があったのであろう。

（四）要因 4：教室などでの L2 習得の場合、インプットの性質が潜在的にはプロトタイプ性判断に影響する。

L1 習得と同様に教室における L2 学習者もインプットに頼っているわけである。自分自身で分類辞の複雑な規則を引き出す必要は必ずしもないが、そうすることはできるであろう。ただし、意味規則を自分で引き出せたり明示的に教えられたりしても、例えば「本」で数える範疇では「本塁打」や「シュート」や「電話の通話」のような例外があることは覚悟しなければならない。こういった例につ

いては意味規則からは予測不可能である。結局、それぞれについてインプットからどの分類辞が適切なのか覚えるしかない。

L1 習得や自然な L2 習得環境とは異なり、教室での学習者は授業における説明や練習を通じてわかりやすい形でインプットが与えられる。Sharwood-Smith（1993）は第 2 言語のインプットをわかりやすくする方法は種々あり、学習者の知識や運用能力に及ぼす影響も一様ではないという。分類辞を教える際も語学教師は様々な手法を用いる。単純な方法としては、例を与えて関係する意味規則を明示的に説明する方法である。プロトタイプ的な例は比較的容易に学習できるので、当該範疇の例示として用いられることが多くなる（Lakoff 1987; Taylor 1998）。今回の研究の対象でも、教師が分類辞「本」の説明のために最初に用いたり頻繁に用いたりした例は、学生にとってこの範疇の「最適例」であるということになろう。同様の説明は L1 の語彙習得においても見られる。子供が最初に習得する語は基本レベルの範疇のプロトタイプ的成員の名前であることが多い（Clark 1983）。このプロトタイプ的指示物はその後さらに複数の素性を含むものとして分析され、いくつかの素性は共有するがすべてを共有するわけではない対象物に拡張されていく。ところが、子供にとっての基本レベルでプロトタイプ的な指示物は大人の場合と同じとは限らない（Mervis and Mervis 1982）。今回の研究においても、母語話者にとってプロトタイプ的と考えられる使用例が学習者にとってもそうであるとは限らない。Kuo（2000）において、学習者の一部は分類辞を学習した際、それと結びつく名詞を一緒に学習したと自己申告している。母語話者と比較すると、学習者は分類辞と名詞の結びつきを覚えるという方法に頼りがちである。比喩的な拡張例は授業でその範疇の例示として教えられることはないだろう。抽象的な拡張例についてはインプットがなく親近感も感じなければ、学習者がそれらを区別することは難しくなる。

七、語学教育への示唆と結語

以上をまとめると、本研究から次の点が明らかになった。(1)L1、L2 両群の被験者は分類辞「本」の使用について具体的な基本物体のほうが抽象的なものよりも典型的であるとした。(2)両極端の非常に良い例や非常に悪い例においては被験者の判断は概ね一致したが、中間的成員については不一致が大きかった。(3)L1 話者のプロトタイプ性判断は L2 話者に比べ成員間の区別がはっきりとし尺度上では広く分布した。この結果を説明する 4 つの要因を提出した。第 1 に、個人間また文化・言語間で共通性があるのは人間の認知過程の普遍性による。第 2 に、学習者の L1 に基づくプロトタイプは中間言語のプロトタイプ性判断に影響する。第 3 に、範疇内の成員の相対的出現頻度や親近性がプロトタイプ性判断の重要な要因となる。第 4 に、教室などでの L2 習得の場合、インプットの性質が潜在的にはプロトタイプ性判断に影響する。

ここで生じてくる疑問の一つは、外国語教師が母語話者のプロトタイプ性判断と中間言語の判断の相違を知っておく必要があるかということである。目標言語におけるプロトタイプ性の順位付けを知っているからといってそれを必ず教えないといけないということではない。今まで見てきたように順位付けは言語文化と強く結びついているので、文化的背景の異なる L2 学習者にそのまま与えたとしてもあまり役に立たないかもしれない。一方、分類辞「本」のような複雑な範疇についての情報を学習者に与えるとすれば、その範疇化についての説明とともに典型例を示すことになる。L1 における分類辞習得と同様に L2 学習者もインプットとして使用例に基づいて習得するわけだから、周辺的な成員を頻繁に見たり聞いたりすることによって、学習者は代表的ではなく認知的に拡張されたものにも親近感を持つようになる。ところが、このような周辺的な例を強調すると不必要に目立つことになり、本来の順序付けを歪めてしまうかもしれない。

最後に、今回の研究を発展させる可能性に触れておく。被験者の

学習者が中国語母語話者に限られていたので、母語や自文化の影響を十分には検証できていない。分類辞を用いない言語を母語とする学習者との対比が必要である。また、信頼性を高めるためには異なるテスト方法による追試が必要である。また、今回説明要因として挙げた理論仮説やその相互関係を検証していくことは今後の研究に残されている。

参考文献

Adams, Karen L. and Nancy Faires Conklin (1973). Toward a theory of natural classification. In *Papers from the Ninth Regional Meeting, Chicago Linguistics Society*, C. Corum, et al. (eds.), 1-10. Chicago: Chicago Linguistic Society.

Aikhenvald, Alexandra. Y. (2000). *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Devices*. New York: Oxford University Press.

Aitchison, Jean. (1992). Good birds, better birds and amazing birds: The development of prototypes. In *Vocabulary and Applied Linguistics,* Pierre J. L. Arnaud and Henri Béjoint (eds.), 71-84. London: Macmillan Academic and Professional.

Andersen, Roger W. and Yasuhiro Shirai (1994). Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition* 16: 133-156.

Bornstein, Marc H. (1984). Descriptive taxonomy of psychological categories used by infants. In *Origins of Cognitive Skills: The Eighteenth Annual Carnegie Symposium on Cognition*, Catherine Sophian (ed.), 313-338. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.

Chang-Smith, Meiyun (2000). Empirical evidence for prototypes in linguistic categorization revealed in Mandarin numeral classifiers. *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 35(2): 19-52.

Clark, Eve V. (1983). Meanings and concepts. In *Handbook of child psychology*(4th edition), Vol. 3: *Cognitive development*, Paul H.

Mussen (ed.), 787-840. New York: John Wiley & Sons.

Coleman, Linda and Paul Kay (1981). Prototype semantics: The English word *lie*. *Language* 57 (1): 26-44.

Correa-Beningfield, Margarita R. (1990). Prototype and second language acquisition. *Revue de Phonetique Appliquee*, 95-97: 131-135.

Croft, William (1990). *Typology and universals*. New York: Cambridge University Press.

Denny, J. Peter (1976). What are noun classifiers good for? In *Papers from the 12th Regional Meeting*, 122-132. Chicago Linguistics Society.

__ (1979). Semantic analysis of selected Japanese numeral classifiers for units. *Linguistics* 17: 317-335.

Downing, Pamela (1996). *Numeral Classifier System: The Case of Japanese*. Amsterdam: John Benjamines.

Erbaugh, Mary S. (1984). Scissors, paper, stone: Perceptual foundations of noun classifier systems. *Papers and Reports on Child Language Development* 23: 41-49.

Hansen, Lynne and Yung-Lin Chen (2001). What counts in the acquisition and attrition of numeral classifiers? *JALT Journal* 23 (1): 90-110.

Hartford, Beverly S. (1987). Prototype semantics: The development meaning in a second language. *Australian Review of Applied Linguistics 11* (1)

Hiki, Kurumi (1996). An exploration into internal structure of semantic categories: a comparison of prototypicality judgments of learners and native speakers. *JACET Bulletin* 27: 35-49.

Hu, Guangwei (2002). Psychological constraints on the utility of metalinguistic knowledge in second language production. *Studies on Second Language Acquisition* 24: 347-386.

Hundius, Harald and Ulrike Kölver (1983). Syntax and semantics of numeral classifiers in Thai. *Studies in Language* 7: 165-214.

Iida, Asako (1996). Classification and categorization: Semantic properties of Japanese classifier *hon*. *Tokyo University Linguistics Papers* 15: 113-137.

Ijaz, I. Helene. (1986). Linguistic and cognitive determinants of lexical acquisition in a second language. *Language Learning* 36: 401-451.

Inoue, Kyoko (2000). Visualizing ability and nominal classification: evidence of cultural operation in the agreement rules of Japanese numeral classifiers. In *Systems of Nominal Classification,* Gunter Senft (ed.), pp. 217-238. Cambridge, Cambridge University Press.

Kao, Rong-Rong (1993). Crosslinguistic constraints on the development of the L2 lexicon: A study of Japanese *me* “eye” for speakers of learning Chinese as a second language. *Soochow Journal of Foreign Languages and Literatures* 9: 35-52.

Kellerman, Eric (1986). An eye for an eye: Crosslinguistic constraints on the development of the L2 lexicon. In *Crosslinguistic Influence in Second Language Acquisition,* Eric Kellerman and Michael Sharwood Smith (eds.), 35-48. Oxford: Pergamon Press.

Kuo, Jenny Yi-chun (2000). Strategies for learning classifiers. In *Social and Cognitive Factors in Second Language Acquisition*, Bonnie Swierzbin et al (eds.), 424-442. Somerville, MA: Cascadilla Press.

Lakoff, George (1986). Classifiers as a reflection of mind. In *Noun Classes and Categorization: Proceedings of a Symposium on Categorization and Noun Classification*, Colette Craig (ed.), 13-52. Amsterdam: John Benjamins.

__ (1987). *Women, fire and dangerous things*: *What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Lee, M. (1988). Language, Perception and the World. In *Explaining Language Universals,* John A. Hawkins (ed.), 211-246. Oxford:

Blackwell.

Matsumoto, Yo (1985). Acquisition of some Japanese numeral classifiers: the search for convention. *Stanford Papers and Reports in Child Language Development* 24: 79-86.

__ (1993). The Japanese numeral classifiers: a study of semantic categories and lexical organization. *Linguistics* 31 (4): 667-713.

Maridaki-Kassotaki, Katarina (1997). Are rating-based procedures reliable for derivation of typicality judgements from children? *Behavior Research Methods: Instruments and Computers* 29 (3): 376-385.

Mervis, Carolyn B. and Cynthia A. Mervis (1982). Leopards are kitty-cats: Object labelling by mothers for their thirteen-month-olds. *Child Development* 53: 267-273.

Palmberg, Rolf (1987). Patterns of vocabulary development in foreign-language learners. *Studies in Second Language Acquisition* 9: 201-220.

Pulman, S. G. (1983). *Word Meaning and Belief.* London: Croom Helm.

Rosch, Eleanor (1973). On the internal structure of perceptual and semantic categories. In *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, Timothy E. Moore (ed.), 111-144. New York: Academic Press.

__ (1975). Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.

__ (1978). Principles of categorization. In *Cognition and Categorization*, Eleanor Rosch and Barbara B. Lloyd (eds.), 27-48. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.

__ and Carolyn B. Mervis (1975). Family resemblances: Studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology* 7: 573-609.

Sharwood-Smith, Michael (1993). Input enhancement in instructed SLA: Theoretical bases. *Studies in Second Language Acquisition* 15: 165-

179.

Shirai, Yasuhiro and Roger W. Andersen (1995). The acquisition of tense/aspect morphology: A prototype account. *Language* 71: 743-762.

Southgate, Victoria and Kerstin Meints (2000). Typicality, naming, and category membership in young children. *Cognitive Linguistics* 11 (1/2): 5-16.

Tai, James and Lianqing Wang (1990). A semantic study of the classifier *tiao*. *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 25 (1): 35-56.

Taylor, John R. (1995). *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory* (2nd ed.) New York: Oxford University Press.

__ (1998). Syntactic constructions as prototype categories. In *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure,* Michael Tomasello (ed.), 177-202. Mahwah, N.J.: Erlbaum.

Uchida, Nobuko and Mutsumi Imai (1999). Heuristics in learning classifiers: The acquisition of the classifier system and its implications for the nature of lexical acquisition. *Japanese Psychological Research* 41 (1), 50-69.

Wierzbicka, Anna (1990). “Prototypes save”: On the uses and abuses of the notion of “prototype” in linguistics and related fields. In *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization,* Savas Tsohatzidis (ed.), 347-367 . New York : Routledge.

付録１　中国語母語話者用質問紙

有關於本實驗的說明

在日文裡，當我們使用到名詞時，常常要用到「量詞」。什麼是「量詞」呢？舉例來說，下列日文名詞組如「３匹の子豚（子豚３匹）」、「２冊の本（本２冊）」、「１台の車（車１台）」中的“匹”“冊”“台”等等在文法中就叫做「量詞」。

通常，不同的名詞有可能使用同一個量詞。以中文爲例，‘毛綫’、‘火’、‘麵糰’、‘亂麻’等名詞都可以使用量詞「團」。話雖如此，不同的名詞即使可以用同一個量詞，在意象的表現上可能有不同程度上的差異。譬如說，基本上「團」所表現的意象是球狀，因此，「一團毛綫」中的名詞「毛綫」就相當能表現出這種球狀的形象。相對地，同樣可以使用「團」的名詞如「火」「輕煙」或是「棉花」可能在這種意象的表現上都是呈現出或多或少的差異。同樣地，日文裡的名詞在使用量詞上也呈現出這種不同程度的代表性。以下的兩張問卷是有關日文的量詞“枚”和“本”在與名詞的組合使用上的研究。

在文法上，表（一）當中的名詞在數量的表現上都要使用數量詞“本”。

表（一）

日本語	中文意義
鉛筆	鉛筆
髪の毛	頭髮
木	樹木
指	手指、腳指
ビデオ（テープ）	錄影帶
缶ジュース	罐裝果汁、飲料
本塁打	全壘打
勝負（しょうぶ）	（柔道比賽）回合
映画	電影
シュート	（足球）射門

在以下的問卷中，請您就每一組名詞比較，兩者當中您認爲哪一個名詞較能表現出日文量詞「本（ほん）」的典型意象。換句話說，當我們談到量詞「本（ほん）」的時候，您覺得上下兩個名詞中，哪一個是比較好的例子。請注意，每個人所認爲的“典型性”或“代表性”可能有所不同，而這項實驗更沒有所謂的標準答案。謝謝您的合作。

性別（男・女）　年齢（　　）歳　あなたの母語（第 1 言語）（　　語）

日文量詞「本（ほん）」的典型／代表性程度實驗

在下列各組名詞裡，請在上下兩者當中選出您認爲較能表現出日文量詞「本」的意象的名詞。譬如說，如果要您舉例說明「本」的用法，您覺得「３本の鉛筆（鉛筆３本）」和「３本の髪の毛（髪の毛３本）」兩者當中，哪一個是比較好的例子呢？請在括弧中打圈（○）。

1（　）鉛筆
（　）髪の毛

2（　）木
（　）指

3（　）鉛筆
（　）ビデオ

4（　）缶ジュース
（　）木

5（　）ビデオ
（　）髪の毛

6（　）指
（　）シュート

7（　）勝負
（　）本塁打

8（　）勝負
（　）鉛筆

9（　）映画
（　）指

10（　）本塁打
（　）シュート

11（　）ビデオ
（　）勝負

12（　）シュート
（　）映画

13（　）木
（　）勝負

14（　）映画
（　）本塁打

15（　）鉛筆
（　）指

16（　）缶ジュース
（　）映画

17（　）シュート
（　）鉛筆

18（　）髪の毛
（　）勝負

19（　）鉛筆
（　）木

20（　）ビデオ
（　）缶ジュース

21（　）勝負
（　）缶ジュース

22（　）ビデオ
（　）本塁打

23（　）木
（　）本塁打

24（　）シュート
（　）ビデオ

25（　）指
（　）勝負

26（　）本塁打
（　）鉛筆

27（　）ビデオ
（　）指

28（　）髪の毛
（　）缶ジュース

29（　）木
（　）映画

30（　）缶ジュース
（　）鉛筆

31（　）髪の毛
（　）指

32（　）シュート
（　）木

33（　）木
（　）ビデオ

34（　）髪の毛
（　）シュート

35（　）鉛筆
（　）映画

36（　）指
（　）缶ジュース

37（　）映画
（　）髪の毛

38（　）本塁打
（　）髪の毛

39（　）映画
（　）ビデオ

40（　）映画
（　）勝負

41（　）本塁打
（　）缶ジュース

42（　）髪の毛
（　）木

43（　）指
（　）本塁打

44（　）勝負
（　）シュート

45（　）缶ジュース
（　）シュート

－－－

付録２　日本語母語話者用質問紙

「本」の実験の説明

日本語ではものを数えるとき分類辞というものを使います。たとえば、「3匹の子豚（子豚３匹）」、「２冊の本（本２冊）」、「1台の車（車１台）」という表現の中の「匹」、「冊」、「台」を分類辞と言います。

普通、一つの分類辞は色々な異なるものを数えるときに使うことができます。たとえば、「台」という分類辞は「テレビ」や「冷蔵庫」や「洗濯機」などを数えるのに使うことができます。こういうものは、「台」を使って数えるもののうち比較的代表的（典型的）なものと言えるでしょう。ところが、「電気スタンド」や「携帯電話」は「台」を使って数えると少し変に思う人もいるかもしれません。少なくとも、「台」という分類辞で数える代表的なものとは言えないでしょう。

それでは、「本」という分類辞で数えるものを２つずつ比べた場合、どちらが「本」で数えるものとしてより代表的（典型的）かということを判断してもらいます。こういう風に考えてもいいでしょう。もしあなたが、外国人の日本語学習者に分類辞「本」の使い方を説明するとしたら、「『本』はこういうものを数えるときに使います」と説明するとき、どちらが代表的（典型的）な例としてふさわしいでしょうか。

回答は人によって違う場合もあります。「正解」「不正解」というものはありませんので、自分の直感に基づいて答えてください。

－－－